

参考資料 大ホールの想定「2,000席程度の、生の音響を重視した高機能な多機能ホール」

■第2回懇話会で提起された『資料5「2. 施設構成と主要施設（たたき台）（1）ホール部門」』に対する意見について

資料で提起した案

案：音響を重視した高機能の多機能ホール 2,000席程度

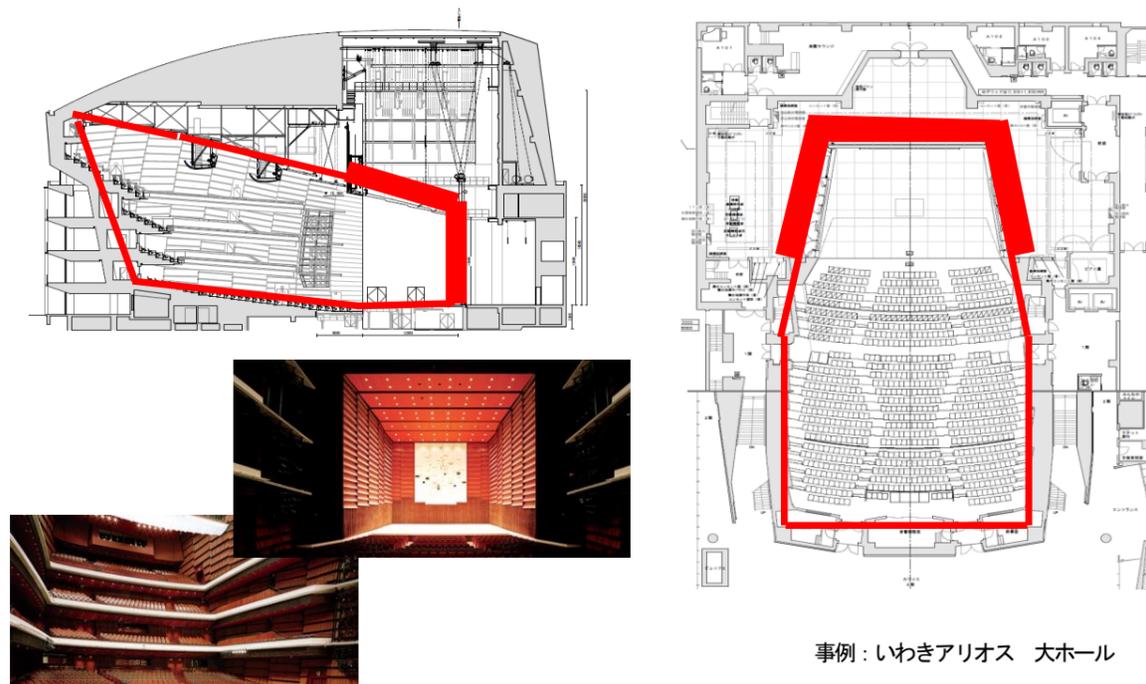
- 生の音源の響きを活かす音楽専用ホールと、多彩な演出が可能で言葉が明瞭に聞こえる劇場、双方の特性を最大限実現するように計画されたホール。
- 従来の多目的ホールとは異なり、今日のホール建築技術や音響設計技術の向上、また音響反射板の性能の向上などによって、それぞれの用途に適したホールとすることが可能になっている。
- このホールは、特にコンサートホール形式にした場合の最適性を優先したホールである。

提起された意見

- 多機能ホールということと、素晴らしい音響のホールということの両立に非常に疑問を持っている。
- クラシック音楽など、電気音響を介さない、生の音の響きがどれだけ本格的かが問題であり、それを外さないでいただきたい。
- 電気を通した音の音響が良くても、それは問題外である。

(1) 音響反射板（装置）を設置して、コンサートホール形式にした場合

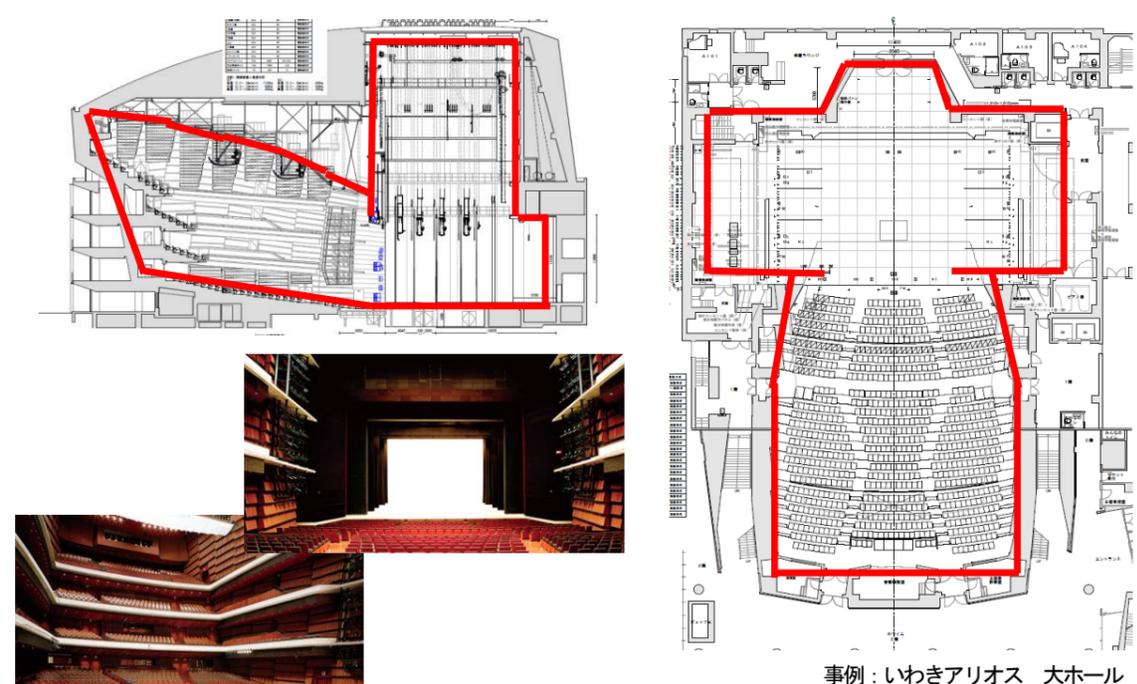
- クラシック音楽のように、生の音源に対して、電気的な変換を行うことなく、音楽専用コンサートホールに匹敵するような響き、音の環境、視覚的デザインを確保する。
- 建築、使用部材、内層デザイン、設備なども含めて、適切な音響設計、施工監理に基づき整備する。



事例：いわきアリオス 大ホール

(2) プロセニアムのある劇場形式にした場合

- 劇場としての機能を果たすため、舞台上での様々な身体的な表現を可能とし、多様な演出を可能とする舞台設備を持つ。電気的拡声、電気音響にも適切に対応する。
- 客席空間は残響が長い、生の音源の響きに対応して造られるため、残響可変装置を設けることも検討する。



事例：いわきアリオス 大ホール

■技術革新と適切な計画と設計・施工

- 建築設計、施工、部材、設備、音響設計、いずれの面でも過去とは異なり、技術が高まっているとともに、多くの経験値が蓄積され、対応能力が高くなっている。
- 現段階から生の音源に対する音響の優先を明確にしていくことで、今後の基本構想や基本計画においても重点化され、設計・施工段階でも、基本的な方針となっていくと考えられる。
- 建築設計とは別に、専門的な音響設計を行い、近年のコンピューターによるシミュレーションだけではなく、音響模型による音響実験を行うことも想定される。



音響模型による音響実験  
新潟市民芸術文化会館（りゅーとびあ）  
コンサートホール

画像：ヤマハ株式会社ご提供